

『百学連環』の英文原資料について

小 玉 齊 夫

明治3年(1871年)11月から私塾育英舎で開始されたいわゆる「百学連環」講義¹⁾は、「口授」を筆記した永見饒香の手になるいわゆる『永見本』によって、その具体的な展開を辿ることができる。西周じしんが講義の草稿として書きとめたとされる、いわゆる百学連環『覚書』は、主要な項目の列挙という性格が強く、細部にわたる説明までは記されていないため、講義じたいの内容を窺うにはいささか不十分な資料であると言える。このため、従来は、『覚書』によって補足しつつも主として『永見本』に依拠して、「百学連環」講義を把握する傾向があったように思われる。

『永見本』は、たしかに英原語の綴りの誤記や誤解などが見出される——「それゆえ、おそらく西周による校閲はなされていない」と考えたいのであるが、しかし西周の『覚書』にも誤記がないわけではない——が、全体としては相当程度に正確に講義を記録していると言える。けれども、講義の筆記が一般にそうであるように、草稿としての『覚書』と『永見本』の記載との間には若干の記述のへだたりがある。たとえば次のような例がある。

『永見本』の記述では、「英国に Encyclopedia of Political Science なるものありて、即ち口授するの教へあり。故に今之に倣ふて浅学の輩を導かむと欲する余か創見に出る所なり」²⁾とある。これと対応する部分を『覚書』で見ると、「創見ノ事」、「Ency ... of jurisprudence ノ事」、「Ency——of phylo——ノ事」³⁾というような項目が記されているだけであり、しかも「Ency ... of jurisprudence」の jurisprudence は、Politic と書かれてあったのを

線で消しその下に書き加えられた語であることがわかる。そして「Ency——of phylo——」については、『覚書』にその記載があるだけで、『永見本』にはこれに應ずる筆述は残されていない。

『覚書』と『永見本』との間にあるこのような記述のへだたり——語句や文の相違、あるいは、一方に或る事項が記載されているが他方にはそれが見出されない——は、西周の「百学連環」講義に於いて以下のような事実のへだたりがあり得た、ということを示す指標となっている。即ち、もし永見饒香の筆記が正確であったとすれば、西周は「Encyclopedia of jurisprudence」と「口授」しなかった——『覚書』に記したとおりの語の発音をしなかった——か、あるいは、講義では「Encyclopedia of Politic (もしくは *Political Science*)」——Politic と *Political Science* との差異はここでは敢えて無視する——と述べたが後に何らかの理由で『覚書』の記載を「jurisprudence」と書き改め訂正した、か、そのいずれかであるということになる。逆に、もし永見饒香の筆記が必ずしも正確ではなかったとすれば、永見饒香は、「Ency——of phylo——」についての筆記は怠たり、jurisprudence を勝手に翻案して——あるいは、想像でしかないが、jurisprudence に対して与えられた説明語を取りちがえて——書き記した、ということになる。言いかえれば、『永見本』には、「記載漏れ」あるいは「改作」があり得る、ということになる。そしてそうだとすれば、たとえば（「英国に Encyclopedia of Political Science なるものありて」）「即ち口授するの教へあり」というような筆述に関しても、その信憑性——西周が本当に「口授」される「Encyclopedia of Political Science」があると考えていたのか否か——に疑念を呈し得ることになる。

「百学連環」に関わる西周と永見饒香の「教養」の差を考慮にいれるならば、一般的には、永見饒香の筆記に「記載漏れ」はあり得たとしても少くとも意図的な「改作」はなかった、と見るべきであろうか。しかしそう判定したとしても、個々の記述のへだたりに関して、『永見本』および『覚書』のいずれを尊重すべきか、実際の講義ではどのような「口授」がなされたのか、等を解明することは、殆んど不可能であるように思われる。ただ、「百学連環」講義で直

接に英語文献に依拠した部分に対しては、その原資料が見出され得るならば、講義の再構成に関わる何らかの解釈の可能性が生れてくる、と言うことはできる。同時に、おそらくは西周が構想した「百学連環」の形成過程をより具体的に確認することもできるように思われる。

本稿が目的とするのは、この、『百学連環』が直接に依拠している英文原資料の究明である。

既に引用したように、「百学連環」講義は「浅学の輩を導」くことをめざしてなされているが、この「浅学」は、西洋学術に対しての「浅学」であって、それゆえにこそ「和漢のことを斟酌して説論する」⁴⁾、即ち和漢の教養を併置し、比較あるいは例示することを通じて、西洋学術への理解を容易にしようとする試みがなされている。本来ならば、この「和漢のこと」に対しても典拠を求めるべきであるかもしれないが、本稿では、『覚書』ならびに『永見本』に見られる英語表記、英文⁵⁾の原資料が何であり得たか、それを明らかにすることに目標を限定する。「和漢のこと」は、西周およびその同時代のいわゆる知識階級の「教養」、ということばの中に封じ込めることにしたいからである。

もとより、この「教養」への封じ込めは、英文資料に依存している知識に対しても援用され得る。『永見本』冒頭に示されているような「英国の Encyclopedia」に関わる講述が、西周の「教養」の現われであることを否定することはできない。オランダ留学以前の独習、ライデンでフィセリングから受けた講義、さまざまな見聞、読書等を通じて獲得された知識、であることに間違いはあるまい。しかし、『永見本』でのこの筆述を支えている具体的な英文字句があれば、「教養」をいわば記述の過程で確定する原資料としてそれを指摘することは可能であろうし、その意義もないわけではないように思われる。

『百学連環』は、以下に提示するように、「英文原資料（の翻訳）」の部分と、西周の「創見」あるいは「教養」の部分から構成されている。しかし、「創見」の部分は、特に西周じしんが『覚書』で明記している場合を除けば——ここでも『永見本』に対する信憑性が関わってくる——「現段階でまだ原資料が見出

されていない部分」にすぎないのかもしれない。同様に、「教養」に関しても、明らかに複数の文献に同種類の記述が存在し知識としても一般的であるような場合を除けば、やはり「現段階でまだ原資料が見出されていない部分」でしかない、かもしれないのである。いずれにせよ、原資料を探るその過程で、西周の「教養」が、実質的にはどのようなものであったのか、その在り様が不十分ながらも明らかにされてくることになる。「和漢のこと」が本来的な「教養」であった時代に西洋學術の移入を企図した、そのような啓蒙的な「教養」の基盤およびその成層が示されてくるのである。

これまでは、『百学連環』に於ける英語表記、英文の典拠が、何らかの“*Encyclopedia*”であるように推測されていた。たとえば、古くは麻生義輝が『西周著作集』（岩波書店、1933年）の『解説』で、「……立論の方法にはミルの論理学、わけても『百学連環』を講述した時に依ったと思はれる原書「エンスaikロペディア」の影響が甚だ多い……」（p. 384）と述べている。しかしこの指摘は具体的な根拠がなく、「エンスaikロペディア」じたいもどの「エンスaikロペディア」を指すのか、漠然としすぎている。また柳田泉は『百学連環に現われたる文学知識』（『国文学研究』第七号、1936年）で「西周はこの講義を準備するに当って、英国出版の *Encyclopaedia of Political Science* に拠るところがあったらしく（…）本文に引用している諸学の定義の英文などは、或は右の *Encyclopaedia* をそのまま引用しているかもしれない」（p. 357）と記している。この“*Encyclopedia of Political Science*”（『永見本』）の存在じたいが、しかし、かなり怪しいものであることは、先に見た記述のへだたりが示している。大久保利謙氏は日本評論社版『西周全集』第一巻（1945年）の「解説」で、「この広汎な知識が如何なるものに拠って集積されたか……永見本の巻頭には *Encyclopaedia of Political Science* の書名が挙っている。その書名から推して政治関係のものでなければならない。これを参考したとしても、尚これ以外に参考したものは少くなかったに違いない」として、「フィセリングの講義」、「ミルの *System of Logic*」、「Lewes の *Biographical History of Philosophy*」等、あるいは「何等か入門書を利用」した、と見られている（p. 35）。

ただしこの解説部分は宗高書房版『西周全集』第四卷(1981年)の『百学連環』「解説」には再録されていないようである。大久保氏はまた別に『明治初年の史学界と近代歴史の成立』で、「この西周の史学思想は我国在来の史学的知識と西洋の百科全書あたりから得た若干の知識を加味して組立てて居るものである」(『明治史論集』, p. 419; 筑摩書房, 1965年)と書かれている。「教養」という面で言えば、「フィセリングの講義」等が『百学連環』の基盤を形成していることは確かであるが、しかし直接に依拠した原資料として見なおすならば、たとえば「Lewes の Biographical History of Philosophy」等は英文表記の相違がありすぎる。また大久保氏の「史学的知識」に関わる部分で、たとえば『覚書』(p. 340~p. 342)に記されている“history,” “chronicle,” “annals”などの分類が「百科全書あたりから得た」ものと推測されているのは、根拠がないわけではないと思われるが、しかし直接の原資料として見なおすならば、やはり不十分な指摘であると言わざるを得ない(本稿 p. 96 参照)。

おそらく、『永見本』を尊重したことが上記のような、典拠としての「百科全書」を想定させたのであろう。しかし、『覚書』の記載を見ていくならば誤解の余地はないのであるが、西周が「百学連環」講義に際して援用した英語表記、英文は、少なくとも主要な術語(「項目」となり得る語)に関するかぎり、いわゆるウェブスターの『An American Dictionary of the English Language』, 1864年版⁶⁾から採られた⁷⁾ものであると言うことができる。

原資料の認定は、しかしながら西周が明記していない部分に対しては、言うならば統計的な確実性に基つかざるを得ない。即ち、或る資料の記述が『覚書』での記述と合致する、その頻度が比較的に高い場合にのみ、その資料を原資料であろうと推定し得るにすぎない。たしかに、一二の項目のみを西周が特別に何らかの資料から引用した、という可能性はないわけではないが、しかし、逆に一二の項目の記述がたまたま『覚書』と一致するからといって、これを原資料と即断することは方法としてはやはり採用し難いのである。

さらに、西周が実際に原資料たるべき文献を読む、そのための物質的・物理的条件が整っていたか、それを確定しなければならないという問題点もある。

上記『ウェブスター辞典』は、『中村正直文庫』にも在ること⁸⁾から推測すれば、西周が参照し得る条件は備わっていたと思われるが、たとえば、後に見るように原資料であることがまず確実である『Beeton's Dictionary of Universal Information』⁹⁾、さらには『Zell's Popular Encyclopaedia』¹⁰⁾等については、これらを西周が「百学連環」講義以前、あるいは、ほぼ同時期に手にすることが可能であったか否か、その客観的な確実性を証することはいささか困難である。また、上記原資料（と見なされる）の記述に於いても、若干の不整合な部分が存在しないわけではないが、それが西周の「不正確」な引用によるものであるのか、あるいは、出版年度の相違によって原記述も異なっているのか、ことによると、西周の「創作」も含まれているのか、やはり明確には確定し得ない。そして言うまでもなく、今日の時点では実際に参照し得る資料が限定されてしまっており、ことによると、西周が依拠した原資料は、上記の諸資料と全く同様の記述がなされている別の資料、であるかもしれない、その可能性がないわけではないのである。

以上のような問題点が在りつづけるために、本稿は、今後の訂正あるいは確定を前提とする、いわば中間報告であらざるを得ないことは、甘んじて付記しなければならない。

注

- 1) 周知のように、『覚書』の中でも「百学連環」という語が用いられてはいるが、しかし西周が講義の標題として採用したのは、「百学提綱」である。『永見本』、『覚書』という名称は、大久保利謙氏による。以下、それぞれの引用は、宗高書房版『西周全集』第4巻（1981年）でのページによって示す。
- 2) p. 11。『永見本』での「総論」にあたる、いわゆる甲、乙二本のうち、大久保氏によるなら、甲本の方が講義じたいにより近い表現を記してある、とみられるので、本稿では原則としてこの甲本からの引用をする。
- 3) p. 313。
- 4) p. 11。『覚書』にはこれに関連する記載はない。
- 5) 『覚書』には、他に、オランダ語、主として法律関係のフランス語、語源等に関してのギリシア語、ラテン語等が記されている。フランス語原資料については今後の課題とする。なお西周の『遺書目録』には、「Encyklopaedie」と冠された

ものが2点（そのうちの1点はヘーゲルの著作の解説かもしれない）があるが、ドイツ語表記であるため、「教養」としてはともかく、直接の原資料ではないと推測される。

- 6) Noah Webster による『A Dictionary of the English Language』の初版は1828年であるが、西周が依拠したのは、おそらく、Ch. A. Goodrich 及び N. Porter によって増補改訂された1864年版である。たとえば“Science”の項など、1828年版には、1864年版にある Sir W. Hamilton からの引用などが見出されない。なおこの1864年版は、1879年の改訂までは同じ内容であったはずであるが、西周が参照したのが何年発行のものであるのかは確定し難い（1847年版、1859年版との異同は確認し得なかった）。
- 7) 『覚書』（p. 313, p. 314）に “Webster,” “See Webster” と示されている。
- 8) 成蹊大学『中村正直文庫』蔵の『ウェブスター辞典』は1867年発行のものである。中村正直は、後に明六社での関わりもあり、西周も、おそらくほぼ同じ頃の『ウェブスター辞典』を利用していた、と考えられよう。（成蹊大学『中村正直文庫』では、『The Encyclopaedia Britannica』第八版（1853年刊）、Sir W. Hamilton の『Lectures on Metaphysics and Logic』第2巻（1864年刊）も参照することが出来た。同図書館の御厚意に感謝する次第である）。国会図書館には、『ウェブスター辞典』の1864, 1867, 1872年刊行のものがあるが、それらの内容に異同はないと見られる。
- 9) 『Beeton's Dictionary of Universal Information, comprising geography, history, biography, mythology, Bible knowledge, chronology, etc.』（London, 1858~62）。但し、参照したのは、国立国会図書館蔵のもので、同じく London での発行であるが、S. O. Beeton ではなく「Ward, Lock, and Tayler」発行となっている。遺憾なことに、発行年は記されていない。以下、本稿では「B-1」と略記する。同じく『Beeton's Dictionary of Universal Information, comprising a complete sommery of the Sciences, of the arts, of literary knowledge, etc.』（London, 1861~65）も、西周は参照したと思われるが、本稿ではおそらくこれと同内容と見られる2巻本の、『Beeton's Science, Art and Literaure』（London, 1870~73）をも参照した（同じく「Ward, Lock & Tayler」発行）。国会図書館蔵であるが、発行年はやはり記されていない。また、『Beeton's Dictionary of Universal Information, comprising a complete sommery of the moral, mathematical, physical and natural science』と題されているものも、内容は上の2巻本の合本と思われ、異同はないと思われる（国会図書館蔵を参照した。同じく「Ward, Lock & Tayler」発行だが、発行年記入なし）。以下、本稿では、これを『B-2』として略記する。
- 10) L. Colange 編の『Zell's Popular Encyclopaedia: a universal dictionary of

English language, science, literature and art』は、「Encyclopaedia」と冠せられてはいるが、副題にあるように2巻本の「辞典」とでも言うべきものであり、参照したのは国会図書館蔵の1871年刊、Philadelphia（アメリカ）の T. Ellwood Zell の発行である。しかし、この『Zell's Popular Encyclopaedia』を原資料と断定するには、若干の難点がある。ひとつは、「百学連環」講義が1871年11月から始められているのに、この『Zell's ...』は、The National Union Catalog に於いても「1870～1871」と発行年が記されており、時期的に西周が即座に手に入れられたか、という点である。また、主要な項目を見ると、『Zell's ...』の記述は、そのおよそ $\frac{3}{4}$ （概算でしかない。場合によっては全く同じのものもある）は、前注で挙げた『Beeton's ...』の説明を借用しており、その後に（『Beeton's ...』初版より約10年後の出版であるから）補足的事項が付け加えられているだけである。西周が、ほぼ同内容のこの『Zell's ...』を、『Beeton's ...』に拠った後に更に調べ直したか、いささか疑問であるように思われる。そうであるにもかかわらず、ここでわざわざ『Zell's ...』を原資料として挙げたのは、量的には非常に僅かではあるが、この『Zell's ...』に記載された事項が『覚書』に見出されるからである。勿論、西周が別の資料に依拠した可能性は、依然としてやはり、残されている。以下、『Zell's...』を『Z』として示す。

以下、『百学連環』の記述に即し、但し「和漢のこと」に関わる部分は除外した上で、『覚書』（以下、覚によって示す）、原資料（それぞれの原資料標題の頭文字等によって示す）、『永見本』（永によって示す）の間の対応を検証していくことにする。原資料からの引用文中の斜字体（原資料中の斜字体部分はこれに傍線を付す。但し、ギリシア語、ラテン語についてはそのまま記してある）が、『覚書』および『永見本』での傍線を付した部分と対応する（場合によってはマル囲み数字で相互の対応を示している）箇所であり、具体的には、英文字句どおりの引用であるか、その（日本語への）翻訳となっている。言い換えれば、『覚書』ならびに『永見本』の記述で傍線が付されている部分は、（西周の「教養」の一環ではあろうが）具体的な英語文献に拠った部分であるということになる。左端の数字によって新たな項目が立てられることになるが、おそらく広義の「教養」が、この項目の移行の際に現われてきているはずであり、それへの言及も含めての補足的説明が補として示されている。いずれの記述に於いて

も、不必要に煩雑となるのを避けるため、引用は理解可能な範囲内で省略されている。また旧漢字は新漢字に直し、行カエなども、適宜、変更されている。

1

覚 (p.313) Encyclopedia 英仏日和 百学提綱 総論 Introduction^{*1)}
 創見ノ事 特情ニ関ハル事 学域ノ事 業界ノ事 alphabetic ordre
 ノ事 Ency...of jurisprudence ノ事 Ency—of phylo— ノ事
κυκλος circle παιδεία to bring up child εγκυκλοςπαιδεία

W^{*2)} **Encyclopaedia** (p.445): [Gr. *ἐγκυκλοπαιδεία*, for *ἐγκύκλιος παιδεία*, *instruction in a circle, or circle of instruction*; (...) See CYCLOPEDIA (...). *The circle of sciences*; a general survey of human knowledge; especially, *a work in which the various branches of science or art are discussed separately, and usually in alphabetical order*; (...)

同 **Cyclopedia** (p.328): [From Gr. *κύκλος*, *circle*, and *παιδεία*, the *bringing up of a child, education, erudition*, from *παιδεύειν*, to *bring up a child*, (...). *The circle or compass of the arts and sciences*; *circle of human knowledge*. (...)

永 (p.11)。英国の Encyclopedia なる語の源は、希臘の ἐγκυκλιος παιδεία なる語より来りて、即其辞義は童子を輪の中に入れて教育なすとの意なり。故に今之を訳して百学連環と額す。従来西洋法律等の学に於ては、総て口訣を以て教授なすと雖も、此 Encyclopedia なるものを以て口授するの教あることなし。然れとも英国に Encyclopedia of Political Science なるものありて、即ち口授するの教へあり。故に今之に倣ふて浅学の輩を導かむと欲する余か創見に出る所なり。併かし欧羅巴中 Encyclopedia なる書籍あるは、甚タ許多にして、英国の如きは、alphabetical とて、即我かイロハといふに同しく、彼の ABC 等の符徴を以て部分し、其符徴に依て種々の学科を引出す所の書籍凡そ十二巻とす。学者則此書に就て知らんと欲するところの学科を引出して穿鑿するの

具に供す。元来此の Encyclopedia なる書は、百般の学科を挙て記載せるものにて、一々之を枚挙するに暇あらず。故に唯タ學術に相関渉して要用するところのミを挙げ、且つ和漢のことを斟酌して説論する所なり。

凡そ學問には學域と云ふありて、地理學は地理學の學域あり、政事學は政事學の學域あり、敢て其域を越えて種々混雜することなし(…)。何れよりして何れ迄其學の域たることを分明識察して、其境界を正しく區別するを要すへし(…)。

- *1) 「総論 Introduction」とあることは、西周が依拠した資料に「Introduction」と既にあったのか、あるいは、「総論」は英語で「Introduction」とであるとして並記したのか、そのいずれかであるように思われる。そして内容から判断するかぎり、「百学連環」に関する英文資料から「Introduction」の部分をそのまま翻訳した、とは考えにくい。西周がさまざまに採集した知識が、可能なかぎりの体系化をめざして「寄せ集め」られているからである。従って、ここは、西周が「総論」を述べるそのついでに英語表記をも示したこと、即ち『覚書』には西周が自身の「教養」として提示した英語表記がないわけではないこと——英原語、英文のすべてが典拠を有するものではないこと——を示している。

- *2) Wは、既述のいわゆるウェブスターの、『An American Dictionary of the English Language』(1864年版)を指す。

補 たたとえば『Encyclopaedia Britannica』(以下、『EB』と記す)の1771年版(初版)には、扉の部分に、“The different sciences and arts are digested into distinct treatises or systems; and the various technical terms. &c., are explained as they occur in the order of the Alphabet.” と、いわば「説明」がなされている——1853年刊(第八版)にはもはや見出されない——。ここに限らないのだが、西周が『EB』を参照したか否か、確定はし難いのだが、たとえば同八版での「Logic」の項は p. 567 から p. 634 まで、後出の「Liberty of press」ですら p. 360 から p. 372 まで(いずれも第13巻)、というような長文の記述がなされていることからすれば、「教養」の

ために読んだことはあり得ても、「百学連環」講義のために直接引用する資料とした、とは考えにくい。『永見本』の記述に若干の疑念があることは既に言及したが、「英国」の「Encyclopedia」「十二巻」というのも、裏づけがかなり困難である。『EB』（第八版）は、22巻（含 Index）であり、『Chambers's Encyclopaedia』の1860～1868年刊のものは10巻である（『Chambers's Information for the People』の2巻を合わせれば「十二巻」にはなるが…。この Chambers の『Information』の方は、後に文部省から『百科全書』として出版された点も含め、叙述がABC順にいわゆる「学術」の紹介の側面が強く出されており、直接には確証できないが、ここでの筆述のひとつの根拠であるかもしれない。但し、たとえば『English Cyclopaedia』（Ch. Knight 編；London, 1866年刊）も“List of Subjects”として、“Acoustics, Antiquities, Architecture, Astronomy, Chemistry, Civil Engineerng, Dynamics…”等の「学術」の名称を挙げているように、今日のものよりは「学術」紹介の比重が高い、という、この時代の「百科事典」に通有する特色であったと見るべきかもしれない）。いずれにしても、『B-2』, Encyclopaedia の項（p.712～p.714）にも多くの「百科事典」が挙げられている（その内、「十二巻」のものは“National Cyclopaepia”（1847～51）のみである）が、特定することは難しい。学問の「領域」については、フィセリングの講義等での教示に基づくものであろうか。

2

覚 (p.313) 学術技芸ノ事 字義ノ事 学ト道ト事 道芸ノ事 science and arts ノ事 La Scio ars artis to fit or join together science et(?) arts ノ区別ノ事 Sir William Hamilton ① Science is a complemnt of cognitions, having, in point of form, the character of logical perfection, and in point of matters, the

character of real truth.

art Webster art is a system of rules serving to facilitate the
 performance of certain actions. ^②synonym In science, scimus
 ut sciamus, / (p.314) in art, scimus ut ^③producamus ^③and there-
 fore science and art may to be said investigations of truth,
 but science inquires for the sake of knowledge, art, for the sake
 of production, and science is more concerned with the higher
 truth, art with the lower 学ハ上面ノ工夫 術ハ下面ノ工夫

W **Science** (p.1180) : (...) 4. (...) specifically, knowledge duly ar-
 ranged, and referred to *general truths and principles on which*
it is founded, and from which it is derived ; a branch of learn-
 ing considered as having a certain completeness ; philosophical
 knowledge ; profound knowledge ; complete knowledge ; true
 knowledge. (Science is...a complement of cognitions, having, in
^①point of form, the character of logical perfection, and, in point
 of matter, the character of real truth.) Sir W. Hamilton.

永 (p.12) 學術技芸 (Science and Arts) (...) 學術の二字則ち英語にては Sci-
 ence and Arts をラテン語には Scio 私カ物ヲ知ル ars 又は artis. 大既此の
 如しと雖も、其の學問といふ所以を深く知らさるへからず。古昔英人 Sir Wil-
 liam Hamilton なる者學問と云ふを區別して云へる / (p.13) 語に Science
is...real truth (覺, **W**に同じ) の如く知ることの積ミ重リの意味なりと雖も、
 徒らに多くを知るのみを以ては學問とはせざるなり。其源由よりして其真理を
 知るを學問と為すなり。而して其學に定義と云ふあり。則ち definition. 故に
 政事學は政事學の定義なかるへからず。

補 永には、Sir W. Hamilton の “Science” 定義に訳語が付されており、
 それはそれで興味深いものであるが、本稿では省略した（以下も同
 様）。西周が**W**からではなくハミルトンの著作から直接にこの「定義」
 を引用した、と考えられないわけではない。**W**に（従って覺および永

に) 引用されたこの“Science”規定は、ハミルトンの『Lectures on Metaphysics and Logic』の第2巻, 『Logic』(1864年刊)のp.335に, “definition of Science”として記載されている。但しハミルトン原文では, “Science is a complement of cognitions, having, in point of Form, the character of logical Perfection; in point of Matter, the character of Real Truth.”とあるように, 大文字の採用などの表記上のちがいが認められる。Science, Art の他の項も考慮すれば, やはり直接にはWに依拠したと見る方が妥当であるように思われる。

ラテン語の“Scio”に関して, Wには各国語での表現のひとつとして, “Lat. *scientia*”とあるのみであるが, しかし, たとえば『The Imperial Dictionary of English, technological, and scientific, on the basis of Webster’s English Dictionary』(John Ogilvie 編; 2巻, London, 1874年版)の“Science”の項(第2巻, p.680)には, “from scio, to know”とあり, 全く同じ記載が『A New and Universal English Dictionary』(Thomas Kelly 編; London, 発行年記入なし——おそらく1860年代か——)にも見出されることからすれば, 殊更に典拠を求めるまでもない, ようにも思われる。『A Dictionary of the English Language』(R. G. Latham 編, London, 1872年版)にも, “Science”に関して, Wおよび上記の辞書とほぼ同種の説明が与えられているが, (上記の辞書と同様に)ハミルトンの引用文は記載されていない。ついでに言えば, 『EB』(第八版)には「Science」という項目は立てられていない。

「定義」については, たとえばミルの『System of Logic』の冒頭, 「Introduction」の部分でその必要性が述べられている, そのような知識に基づくものでもあろう。

W Art (p.78): [...Lat. *ars, artis*, orig. skill in *joining or fitting*, from Gr. *ἄρσεν*, to join, to fit together; ...]. 1. The employe-

ment of means to accomplish some desired end; the adaptation of things in the natural world to the use of life; the *application of knowledge or power to practical purposes* (...). 2. A system of rules serving to facilitate the performance of certain actions; opposed to science, or to speculative principles; ...

永 (p.13) Art is a system...certain actions (覚およびWと同じ)。原語の如く何事にても、事実上に於て其理を究め、如何(に)してか容易く仕遂へきと工夫を為す之を術と云ふ。

補 「Art」の定義については、『EB』に於いても、“Art is principally used for a system of rules serving to facilitate the performance of certain actions, in which sense it stands opposed to science, or system of speculative principles.” と、Wと同じ記載がなされている。

W **Science** (p. 1180。つづき) : Syn. (...) Science is literary knowledge, but more usually denotes a systematic and orderly arrangement of knowledge. In a more distinctive sense, science embraces thoses branches of knowledge of which the subject is either ultimate principles, or facts as explained by principles or laws arranged in natural order. (...) Art is that which depends on practice and skill in performance. “In science, scimus ut sciamus; in art, scimus ut producamus. And, therefore, science and art may be said to be investigations of truth; but science inquires for the sake of knowledge, art for the sake of production: and hence, science is more concerned with the higher truths, art with the lower; and science never is engaged, like art, in productive application. And the most perfect state of science, therefore, will be the most high and accurate inquiry; the perfection of art will be the most apt and efficient system of rules, art

always throwing itself into the form of rules.” Karslake

永 (p.13) 元来学と術とは混雑しやすきものゆえに Synonym なるものありて、文字の意味を分明に区別せざるへからず。即ち羅句語に In science, scimus ... ut producimus. 学とは原語の通り、あるとあらゆるを分明に知り、其根元よりして、既に何等の物たるを知るを云ふなり。術とは生することを知ると原語の通り、何物にても成り立所のものの根元を知り、其成り立所以を明白に知るを云ふなり。Therefore science and art...with the lower. / (p.14) 学は則ち上への方へ穿鑿し遂けるを云ふなり。術は則ち之に反して下の方へ穿鑿し極むるを云ふなり。

補 以上、見てきたように、「学」と「術」とに関して、W本が原資料であることは明確である。西周の筆記では“In science, ...”が引用文であることがはっきりしないが、これはおそらく William Henry Karslake (英国教会に関しての著作がある) からのものであろう。翻訳（もしくは解釈）が必ずしも直訳ではない（ようである）点も注目すべきであろうか。

3

覚 (p.314) Theory and Practice ノ事 continental use ノ事 Eng. hypothesis speculation Eng writer ノ謬ノコト see Webster

W **Theory** (p.1373): A doctrine, or scheme of things, which terminates in speculation or contemplation, without a view to practice; *hypothesis; speculation.* ☞ “This word is employed by English writers in a very loose and improper sense. It is with them usually convertible into hypothesis, and hypothesis is commonly used as another term for conjecture. The terms theory and theoretical are properly used in opposition to the terms practice and practical. In this sense, they were exclusively employed by the ancients; and in this sense, *they are almost*

exclusively employed by the continental philosophers.” Sir W. Hamilton. 2. An exposition of the general principles of any science; (…) 3. The science distinguished from the art; as the *theory* and practice of medecine. 4. The philosophical explanation of phenomena, either physical or moral; (…)

永 (p.14) 又 ^{観察上}theory, ^{實際上}practice 学に於ても又術に於ても観察, 実際共になかるへからす。学^実術^実観^観。観察とは, 万事其理を極めるヲ云ヒ, 実際とは業サに就て極むるを云ふなり。theory なる文字を英国誤りて speculation 或は hypothesis なる字意に代へて用ゆることあり, 注意せざるへからす。

補 前と同様であるがWでのハミルトンの引用部分は, 前出ハミルトン本の第1巻, 『Metaphysics』(1864年版)のp.120にある。永での「学に於ても又術に於ても…極むるを云ふなり」は, むしろハミルトン本からの影響と言えるかもしれない。即ちWでの引用部分以降は次のように続いているからである。“(... continental philosophers.) Practice is the exercice of an art, or the application of a science in life, which application is itself an art, for it is not every one who is able to apply all he knows; there being required, over and above knowledge, a certain dexterity and skill. Theory, on the contrary, is mere knowledge or science. There is a distinction, but no opposition, between theory and practice; each to a certain extent supposes the other. On the one hand, theory is dependent on practice; practice must have preceeded theory; for theory being only a generalization of the principles on which practice preceeds, there must originally have been taken out of, or abstracted from, practice. On the other hand, this is true only to a certan extent; for there is no practice without theory...” 但し, 下傍線部分は, W本 Practiceの項(p.1021)でも引用されている。学術の「定義」から theory,

practice への移行は、同じくハミルトンの第1巻 (p.79) に, “The most ancient and universally recognized distinction of philosophy, is into Theoretical and Practical.” とあるように, やはり当時の「教養」に基づくものと言うことができよう。

4

覚 (知行ノ道理ノ事」以下省略)

(p.315) ^{単純}Pure and ^{適用}applied ノ事 ^技mechanic or liberal ノ事 trade
 ① ②
 商売職業 useful polite art industrious fine arts^{*)}

W **Science** (p.1180, 前出ハミルトン引用文の下につづいて): Science ^① is applied or pure. Applied science is a knowledge of facts, events, or phenomena, as explained, accounted for, or produced by means of powers, causes, or laws. Pure science is the knowledge of these powers, causes or laws, considered apart, or as pure from all applications. Both these terms have a similar and special signification when applied to the science of quantity; as the applied and pure mathematics.

永 (「欧陽明」「孔子」その他に関わる部分省略)

(p.15) theory, practice の如く学に二ツの区別あり。Pure Science and Applied Science. ^① 単純の学とは理に就て論し, 適用の学とは実事に就て論するなり。之を算術に依て譬ふときは, $2+2=4$ pure。是則ち単純の理に当てて用ゆるなり。 $2+2$ 鳥=4 匹 applied。是亦学なりと雖も, ^{実事}業に就て用ゆるを云ふ。是則ち学の区別なり。

*) 『覚書』には「liberal ノ事」の下に, “vrije kunsten” (「liberal arts」) が, また「useful, industrious」の下に “nuttige” (有用な, 役に立つ, 即ち「useful」), 「fine arts」の下に “schoone kunsten” (美術), “schone” 等のオランダ語が記されている。

W **Art** (p.78. 前出の2. の規定の下に): Arts are devided into ^②

useful, mechanic, or industrial, and liberal, polite, or fine. The mechanic arts are those in which the hands and body are more concerned than the mind, as in making clothes and utensils. These arts are called trades. The liberal or polite arts are those in which the mind or imagination is chiefly concerned, as poetry, music and painting. Formerly the term liberal arts was used to denote the sciences and philosophy, or the circle of academical education; hence, degrees in the arts; master and bachelor of arts.

永 (p. 15) 術に又二ツの区別あり。Mechanical Art and Liberal Art. 原語に
 従ふときは、則ち器械の術、又上品の術と云ふ意なれと、今此の如く訳するも
 ② 適当ならざるへし。故に技術、芸術と訳して可なるへし。技は支体を勞する字
 義なれば、総て身体を働かす大工の如きものはなり。芸は心思を勞する義にし
 て、総て心思を働かし詩文を作る等のものはなり。mechanical は trade と同
 し。則ち商ヒと云ふ字なり。英に於て Mechanical Art と云ふあり。商売と
 云ふと同じ。(p. 16) 又 Useful Art and Polite Art. 又 Industrious Art
 and Fine Arts. 此の如く術に於て種々の語ありと雖も大既意を同ふし、只二
 ツの区別あるのみなり。

補 Arts の分類に関しては他の辞書もほぼ同様の「区別」を行っている。
 ここでは、『永見本』のみでなく『覚書』に於いても、“industrial”
 (W本) を “industrious” に「写しまちがえ」ており、また、“me-
 chanical employment; distinguished from the liberal arts and
 learned professions, and from agriculture” (W本, “trade” の項)
 の意の “trade” を「商売」としているような「不正確さ」が見られ
 る。

5

覚 (p. 315) 此目的ニ従ヘハ士農工商皆学者ノ一部分ニ非サルハナシ 郷
 層(?)ハ政事学ノ一分 農夫ハ化学ノ…百工ハ器械ノ… 商人ハ政
 事器械ノ…紺屋ハ化学ノ理ニ本ク 鍛冶 化学(…)

- 永 (p. 16) 凡そ世人の万民術をなさゝるものなし。術の上には必ず学あるなれば、世間悉ク学者ならさるはなし（以下、ほゞ覚と同様の記述あり）。
- 補 W本初版（1828年版）には，“Science”の項に，“science of agriculture,” “science of navigation”等が示されている。しかし当時の西洋での一般的な見解と見ることも可能であろう。

6

- 覚 (p. 315) 然トモ所謂ル學術トモ云フ者ハ文字ノ資ケナクニハ非ス 文字ノ功德ハ學術ニ関スル尤大シ 其功分テ二トナス 陽第一 今ヨリ古ニ通ス 陰第二 後來ヲシテ今ヲ知ラシム 陽第三 天下四海ノ彼ニ通ス 陰第四 天下四海我ヲ知ル（…）/（p. 316）猶一功德 文字ニ依テ衆説ヲ網羅シ至善ヲ撰フコトヲ得 是ニ由テ日新富有ノ道興ル故ニ今人ハ古人ヨリ賢ナルヘク 弟子ハ其師ヨリ賢ナルヘシ

- 永 (p. 16) 然れとも真の學術に至りては文学^{*}の資なかるへからず。（…）文学^{*}の功德と云ふあり（以下、ほゞ覚と同様の記述あり）。

*) 『永見本』での此の箇所の「文学」は、校訂者の指摘のとおり、「文字」に訂正すべきもののようと思われる。

- 補 W本のたとえば“Language”の項（p. 750）の記載などから、文字の伝達、記録能力についての説明は可能であるが、「文字」を學術の根拠とするのは、西周の「教養」から見るなら、たとえばミルの『A System of Logic』から得たものであろうか。“Language is evidently, and by the admission of all philosophers, one of the principal instruments or helps of thought; and any imperfection in the instrument, or in the mode of employing it, is confessedly liable, still more than in almost any other art, to confuse and impede the process, and destroy all ground of confidence in the result. For a mind not previously versed in the meaning and right use of the various kinds of words, to

attempt the study of methods of philosophizing, would be as if some one should attempt to become an astronomical observer, having never learned to adjust the focal distance of his optical instruments so as to see distinctly.” (1875年版；Vol. I, p.17)。W本でも（ということは当時の西洋思想に於いて）そうであるが、ミルの上記の“language”観は，“instrument”としての機能の面から把握されたものであって、後述の、「學術」に関わる“instrument”の役割の重視と重なり合う見解であると言える。さらに「教養」としての背景を探るなら、西洋學術「再興」の一因としての“the revival of letters”という要因が、西周の「百学連環」形成の意図と絡められたのではないか、と思われる。『EB』（第八版）の第1巻『Dissertation』——中村正直が『明六雑誌』に掲載した『西国一斑』は、荻原隆氏によれば（『中村敬宇と明治啓蒙思想』，p.141），この第1巻の「Dissertation First」の部分の翻訳，解説であるという——の，いわば副題は，“Exhibiting a general view of the progress of metaphysical and ethical philosophy, since *the revival of letters in Europe*”とあるが，これに依拠しなくても，「文字なくして真の學術となることなし」（『永見本』）という観点を立てるのは，それほど唐突な飛躍ではあるまい。また，『Beeton's Universal Information』（『B-2』）の「Philology」の項では，“When Europe, however, began to awake from the deep dream of ignorance that had fallen upon her, and at *the revival of letters* began to turn her eyes to Greece and Rome (…), a philologue was one who, possessing no source of learning in his own mother tongue, was compelled to know two foreign languages in order to be distinguished above his fellows as a scholar.”と記されている。ライデン留学を経て東洋と西洋とを見とおそうとする西周の視点を重ね合わせれば，「無知の夢からの覚醒」はひとり「ヨー

ロッパ」のことだけではないように理解されたはずであり、「文字」への関心も——ひいては「歴史」への関心——学術の根拠に据えようとするほどに強かった、と言えるのであろう。勿論、次の「印刷術」への移行、その記述とも関わり合っている。

7

覚 (p.316) 印刷術ノ発明ハ 西国ノ発明 地動ノ発明ナドト肩ヲ比スル
コト 新宗ノ起 Printing typography 先 日和 千五百年代カ
stereotypography 後 千七百年代ノ終 Liberty of press. the free
right of publishing books, pamphlets, or papers, without pre-
vious restraint or censorship, subject only to punishment for
libelous, seditious or morally pernicious matters.
動 乱 一撓ヌ奥ス 風俗 壞 乱 物

Newspaper daily, morning and evening, weekly, monthly, periodically

W Press (p.1032。1 から 8 までの説明があり、その下に例として):
Liberty of press 以下, “*the free right...morally pernicious matters.*”
(覚と同じ記述) が記されている。

永 (p.16) 文化の學術に資あること極めて大なるものなり。西洋一千四百年来独
逸にて和蘭とも云ふ 印刷術 Printing 則ち版木を発明し、後チ又 版活字 stereotypography 活
字版を発明せしより、大に世界に通し人智を増加するに至れり。是を西洋三大
発明の一とす。其の三大発明とは一は一千四百四十年來コロンヴスなるもの
の亜墨利加の地を発明し、二はガルリヲンなるもの地球の運轉を発明せしこと
と合せて三大発明とす。印刷術発明の根源は、虫の古木を食せしより/(p.17)
起ると云ふ。(…)西洋右の発明に依りて一千五百年來文化大ニ開ケ、一千七百
年来に到りて liberty of press 印刷自在と云ふこと起れり。則ち下の趣意を
以て The free right...morally pernicious matters. (覚およびWに同じ)。
原語の通り一撓動乱を起し、或は風俗を乱たすの外は、総て書物新聞の類を自
在に世に公ケにするの權を平民に免せり。其自在の權を免せしは英國を以て始
めとす。唯り仏國に於ては其權を今尚ホ平民に免すことなし。故に今日の国乱

に及ふ。猶是等に依る多かるへし。其他欧羅巴中皆其の自在を得て、文化益々盛なり。一千八百年来に到りては Newspaper 新聞紙大に盛むに行はれ、daily...periodically (覺に同じ) の如く、日々に、朝夕に、月々に、一週毎に、四季毎に新聞紙を発行せざるなし。故に英国などにては平民新聞に依りて学フの外、別に學問は為さすと云ふに到れり。

補 『B-2』, Newspaper の項 (p.1286~1289) にも、その種類についての記述はある (periodically は見当らない) が、やはり体験的な「教養」に基づくものとするべきであろうか。フランスでの「自在の権」については、『Z』の Newspaper の項 (第2巻, p.469) に言及がある。ハーレムには、活版印刷の発明者 (のひとり), Janszoon の記念碑があり、沢太郎左衛門もそれを見ている (『幕府軍艦記事』; 『続幕府和蘭留学関係史料集成』, p.291) から、おそらく西周も、この項目に関わる知識 (“printing” も含めて) は得ていたと言えよう。

8

覺 (p.316) 文字ノ用學術ニ関スル実大ナリトス是ニ由テ古人真ニ道ヲ措キ文ト云フコトアリ (以下, 「孔門四科」, 「王仁」 「菅江二家」等, 省略)。

(p.317) 西洋ノ昔 Seven Science ^{語典} grammar ^{致知} logic ^{文章} rhetorics
^算 ① ^測 ^天 ^音
 arithmetics geometry astronomy music 後世 ^② belle lettres
^{人道} ^{ママ} humanities (?) originally means mental civilization and next,
 ②③ the learning of polite science. ^③ elegant literature including es-
 pecially rhetoric, poetry, history, philology, and criticism, with
 the language(?) in which the standard works in these depart-
 ment are written. classic language in the first rank superior
 greek and roman sometimes modern

W Science (p.1180, 前掲㊦ “Science is applied or pure” の部分
 ——本稿p.67——のつづき) ^① The seven sciences of ancient authors

are grammar, logic, rhetoric, arithmetic, geometry, astronomy, and music.

同じく Science の項, Syn. の部分——本稿 p. 64——のつづきとして: The term *literature* sometimes denotes all compositions not embraced under *science*, but is usually confined to the *belles-lettres*.

同 **Belles-lettres** (p.123): *Polite or elegant literature, including especially rhetoric, poetry, history, philology, and criticism, with the languages in which the standard works in these departments are written; the humanities.*

同 **Humanity** (p.643): (….) 4. *Mental cultivation* befitting man; liberal education; instruction in *classical and polite literature* (….) 5. (pl.) The branches of *polite or elegant learning, as language, grammar, rhetoric, poetry, and the study of the ancient classics; belles-lettres.*

永 (p. 18) 西洋古へは學術を七学と定めり。Seven Sciences. Grammar, Logic, Rhetoric, ^①Arithmetics, Geometry, Astronomy, Music. 右七学は上古希臘より定め伝はるなれば、學術も古く此時に創るを知るへし。其中最も文章に係はる語学、音楽学を主とし、其他を余派とす。当今尚ホ其学科悉く盛なりと雖も、古への如く七学と定めあることなし。

西洋に ^好Belles-lettres と云ふあり。英語 ^{人道}Humanities 或は ^{高上}Elegant literature ^{文章} ②英国文字をヒマニッテと云ふ意は則ち ^③Mental Civilization なる意にして、凡そ文字なるものは心を開くものなれば、文字をヒマニッテ即ち人道と云ふに到れり。心の開くは是道の明かなるなり。心の開くは文字に關係する最も大なりとす。文章に五ツの学あり。Rhetoric, Poetry, History, Philology, Criticism. Belles-lettres ^②を学ふものは此の五学をなさゝるへからず。又語源学は Classic Language, Greek and Latin 此の二語の中何レニても学ふを好しとす。其他 Sanscrit, Hebrew, Persian, Arabian. カラシクなる希臘羅甸二語を学ふの上、当今尚ホ四学を為／(p. 19) ささるへからず (以下、「サンスクリット」についての記述、ここでは省略する)。

補 “Seven sciences” については、前掲の他の辞書に於ても同様の記述

が見られる。“philology”は、『B-2』での記述の一部を既に示した——本稿 p.70——が、「サンスクリット」その他は，“philology”の項で取りあげることにする。

『永見本』の「正確さ」は、ここでも問われることになるが、「文字をヒマニッテ即ち人道と云ふ」というような解釈は、「心」や「道」と関連させようとする意図は理解できるものの、やはり、いささか安直にすぎると言うべきであろうか。

9

覚 (p.318) end &c means 方略 方術 手立 的 弓矢 偶 measure medium 玆ヨリシテ it must likely stand with all mechanical instruments 格物 天文 化学 鋤学 地質古体

W **Mean** (p.822) : (...) 1. That which is intermediate between two extremis; (...) *medium*; (...) *measure*. (...) 3. *That through which, or by the help of which, an end is attained*; something tending to an object desired; intermediate agency or *measure*; (...) *instrument*. (Philosophical doubt is not an end, but a *mean*.) Sir W. Hamilton. [≡] In this sense the word is most usually employed in the plural form means, ...

永 (p.19) (...) 併し文章は學術なるものにあらず。其解は、^的 end, ^{方略} means, ^策 measure, ^媒 medium。総て事を為す必ず目的なかるへからず。其目的を立て之を行ふ則ち方略なり、策なり、媒なり。(…)併學術を達するは唯文章のみならず、又他に種々あるなり。其助けとなるべきものは、^{器械学} mechanical ^{器械} instrument 是なり。其器械を用ゆるの学は第一に格物学、天文学、化学、鋤学、地質学等にて、是等は唯タロ説にて道理を述るのみにては分解なし難き故に、各器械を以て其道理を分明になすなり。故に器械は文章と同しく學術を助くる大なりとす。器用に二ツの區別あり。direct, indirect。上の一ツは直ちに用立ツものなり。又下の一ツは漸々に廻り廻りて助けとなるを云ふなり。

補 語彙相互の関連はW本での説明で可としなければならないが、内容的

な「教養」の根拠としては、既に引用した——本稿 p.70 の哲学的「思考の助け」となる「言語」を「天文観察」上の「器械」に比べている部分——ミルの記述を挙げることもできようか。あるいは、文意は異なるのだが、イギリスでは「microscopes, telescopes, barometers and balances, are freely baptized “philosophical instruments”」とあるような Lewes の指摘（『The Biographical History of Philosophy』；1970年復刻版，p. xvi）にひかれたのであろうか。「茲ヨリシテ」以下の英文の典拠は見出し難い。

10

覚 (p.318) 茲ヨリシテ博物館 museum museum of antiquity for science museum of coin zoological garden botanic garden geographical museum agricultural museum mechanical museum laboratrium patent office for years octroi copyright anatomical museum hereditary lus(?) museum proefschrift*)

*) 「(学位) 論文」の意のオランダ語。

永 (p.19) 又其上に ^{設建物}institution なるあり。その設けとは ^{大学校}school, university, 或は, academy, college, gymnasium. 皆学校の名にして、即ちイン／(p.20) ^{博物館}スチチュションなるものなり。(…)其他 museum, (以下覚に従っての各種 museum 等の説明, 省略)。

補 現在でも “Leiden, Museumstad” と称するライデン (VVV による) に滞在した西周が、体験として——沢太郎左衛門はライデンで「…養老院, 病院, 大学校, 中小学校, 動物園, 植物園, 博物館, 寺院等を…見物」したという (前掲『軍艦記事』。p.275, 『続幕府和蘭留学関係史料集成』) —— 「University」(1575年創立), それに付属する 「Botanical Garden」(1590年創設), レンブラントも通っていた 「Latin school」(1599年設立。1864年まで「高校」として利用されていた) 等の 「インスチチュション」, 即ち学術の確定の助けとなる 「物質的手段」 (“instrument”) に注目したのだ, と言い得るであろ

うか。なお『B-2』, 「Geography」の項 (p. 860) で “institutions for the promotion of Science and Art” として, 「academies, scientific associations, museums, picture-galleries」があげられている。Museum については, 西周のいわゆる『遺書目録』に, 『A Catalogue of the National Gallery of British Art of South Kensington』が含まれている (n°. 233)。“South Kensington Museum. Dept. of Science and Art of the Committee of Council on Education” の発行となっている (正確には, Council の前に Privy が入るようである) が, この “Department of Science and Art” は, 『B-2』での記述の対象でもあり (p. 1518), 「学」と「術」との連関に腐心していた西周が, 時事的な興味 (1851~1856にかけての論議) によって取り寄せたものであるかもしれない。

11

覚 如比シテ 學術皆実験ニ本ツカサル可ラス experience*¹⁾ 形 化物 observation*²⁾ 理 synonym 天文 empiric εμπειρικός experienced. the literature, the instruments and also the various institutions these all are the means of investigating one end but not itself the end this one end is called truth 真理

*1) experiential が併記されている。

*2) observation の下に, —al, 又 “watching” が併記されている。

W **Observation** (p. 903) : (“with suitable instruments” によって「計測する行為」 (“the act of measuring”) が “observation” であることの指摘—第5項—の下に) 【☞】 *When a phenomenon is scrutinized as it occurs in nature, the act is termed an observation. When the conditions under which the phenomenon occurs are artificial, or arranged beforehand by the observer, the process is*

called an experiment. Experiment includes observation. Astronomy is exclusively a science of observation; physics and chemistry, chiefly of experiment.

同 **Experience** (p.481): ... 1. Practical acquaintance with any matter by *personal observation* or trial of it, or by feeling its effects by living through it, or the like; experimental knowledge. (...) Syn. trial, proof, test, *experiment*.

同 **Empiric** (p.442): [Lat. empiricus. Gr. ἐμπειρικός, *experienced*. ...] 1. Pertaining to, or founded upon, *experiment or experience*; *depending upon the observation of phenomena*. (In philosophical language, the term empirical means simply *what belongs to or is the product of experience or observation*.) Sir W. Hamilton

永 (p.21) 凡そ学たるものは (...) 皆実験に入らざるへからず。其実験に二ツあり。Observation, Experience。実験とは現在にして眼のあたり彼より来るものなり。試験とは将来にして己レより穿ち求むるなり。凡そ尋常の学者空理に至るは実際に入らされはなり。学者苟も実際に入るを要すへし。又 Empiric と云ふあり。即ち希臘の ἐμπειρικός なり。此語古昔は用へすと雖も、近来は學術の中なかるへからざるものにして、貴ひ用ゆるなり。こは物をあてはめるといふ定義にして experience と意を同ふし、即ち実事に就て学ふを云ふなり。かく近来専ら Empiric と云ふを用ゆるも、蓋し学者徒らに文事等を學術となし、空理に趨るを防く為なり。故に Literature, instrument, institution, these all are the means of investigating one end. 即ち其目的とは The one end is called truth.

補 **W**本の規定から直ちに永本での記載が出てくるとも思われないが、しかし内容的なへだたりはそれほど認められない。「近来」用いられる「**Empiric**」は、たとえば**W**での **Empiricism** (p.442) を見るならば (“The method or practice of an empiric; pursuit of knowledge by observation and experiment.”) 西周の採用したミルの思想の方向であると理解される (ミルの『A Sgstem of Logic』にも、「of observation and experiment」という一節がある)。しかし、

「Literature, instrument, institution」という三本立て——Literature なのか、あるいは Language, Letter であるのか、いささか不明確だが——は、フイセリングの講義等に由来するかもしれないが、英語表記じたいは西周の「作文」であるような印象を受ける。なお『覚書』中この部分に、“hier blijkt”（このことから、以下のことが言える），“heet” (?) などのオランダ語書きこみがある。

12

覚 (p. 319) (「不立文字」の説等省略) 真理ハ何門ヲ得テ入ルヤノ問アルヘシ 爰ニ新致知学ノ一法 John Stuart Mill induction 帰納ノ法 其反古 reduction 演繹ノ法

補 『覚書』の p. 320～p. 324 の部分は、『永見本』での筆述によって具体的な講義の在り様を示されているが、その内容、ひとつひとつの挿話などは、以後に展開される各「學術」の一例であるので、ここではそれら細目を省略する。英語表記としては、ミルに対しての“A Method of the New Logic”，そして“Positive result”，“negative result” 等がある。次のコントへの橋渡しとして援用されているのだが、その典拠は確定し難い。ミルの“induction”，“deduction” が、いささか不可解な「猫の鼠を喰ふ」，「人の肴を食する」（『永見本』，p. 23～24）に比べられて説明されているのは、西周じしんの「発想」であろうか。

13

覚 (p. 325) 爰ニ一ツの説話アリ ソハ august Comte ^{神学} theological stage ^{空理学} metaphysical stage ^{実理学} positive stage ^マ positivism ^マ mill dondor*) positive negative electricity

(以下「上面ノ工夫」「下面ノ工夫」についての記述……省略)

補 コントの「三段階説」の典拠は、やはり Lewes の『Biographical History of Philosophy』に求めるべきであろうか。しかし『B-2』の「positivism」の項 (p.1421) も簡潔に記述がなされていて、特に System, Method との関わりに於いて参考にした可能性はある。但し西周の挙げる説明例（「カミナリ」から「電気」）のうち、Lewes 本にのみ、“electricity” への言及がある (1970年復刻版, p.659)。

*) 「カミナリ」(雷鳴) をさすオランダ語。

14

覚 (p.325) 而テ學術ニ供スル性質ヲ別テ ^性 faculty ^{適スル質} aptitude ^{受質} capacity
^{才力} talent ^{天賦} gift ^{天稟} endowment ^能 ability ^{伎倆} genius

W **Talent** (p.1350) : (….) 3. Intellectual *abilty*, natural or acquired; mental *endowments* or *capacity*; skill in accomplishing; a special *gift*, particularly in business, art, or the like. *faculty*.

永 (p.32) 学にも才不才あり、術にも才不才ありて、其學術に供するに、faculty あり、aptitude あり、capacity あり、talent あり、gift あり、endowments あり、genius あり、ability あり。

補 “aptitude”, “genius” についても、たとえば “ability” の Syn (= Synonym) として (Wで) 示されている。なお、13から14へ移る前に、『永見本』のみに詳細に述べられているのだが、「学上にて真理を求め而して術に使ひこなす」(永, p.32) ——これは「教養」としては、theory と practice の記述 (本稿 p.66) にあてはまる——に関連して to apply, to profit, to verify など、まさにミルの原語が記されている。

15

覚 (p.326) 陽 acute penetrating Shrewd subtle wisdom pru-

dence 陰 dull stupid fool idiot

W **Acute** (p.17) : (….) 2. Having nice discernement; perceiving or using minute distinctions; *penetrating*; *shrewd*;—opposed to dull or stupid; (….) Syn. *subtile*, ingenious, keen; ...

同 **Fool** (p.529) : 1. One who is destitute of reason, or the common powers of understanding; an *idiot*; (….) 2. (….) one who acts absurdly, or pursues a course contrary to the dictates of *wisdom*; ...

永 (p.32) 又性質に供するに… (以下, それぞれの原語の提示)

補 W本 **Wisdom** の項 (p.1519), Syn. として “Prudence” が挙げられている。

14, 15, 16 は, とともに「学術」に関わる「心理」的要素の挙例(「インスチチュション」等が「物理」的要素であるとすれば)であろうが, これら辞書中の語彙を示すに到るその根拠がやや了解し難い。単に「語彙」それじたいの紹介と見るべきであろうか。

16

覚 (p.328) …学術ニ就テ二通りノ ability or capacity アリ 一ツヲ sagacity ト云ヒ識ト訳ス 一ツヲ skill オト訳ス Sagacity finds out the intermediate ideas, to discover what connexion there is in each link of the chain, whereby the extremes are held together. locke skill is familiar knowledge of any art or science united with readiness and dexterity in execution or performance.

相交錯 スル 錯合
環 連鎖 両端 ママ
合 慣 習
ママ 熟達 精巧 行
為

faculty = クホミ性 capacity = 大小 (以下, 「人面ニ比シテ」 acute, dull, sagacity, skill の記述—p.328～p.329)

- W **Sagacity** (p.1163) : 引用例文として, Locke の “*Sagacity finds out ...are held together.*” (覚と同様) が記されている。
- 同 **Skill** (p.1237) : 1. knowledge, understanding. 2. The “*familiar knowledge...execution or performance*” (ここまでは覚と同様。但し, 以下のようにつづいている), or in the application of the art or science to practical purposes; power to discern and execute; ability to perceive and perform; as, the skill of mathematician, of a surveyor, of a physician or surgeon, of a mechanic or seaman. (…)
- 永 (p. 32) 其學術に供するに區別あり。skill 及び sagacity なり (…)/ (p. 33) 英の Locke なる人の定義に sagacity 即ち識は “finds out the intermediate ...in execution” (「or performance」がぬけているが, その他は覚と同様)。
(以下, 『永見本』では, 『覚書』と異なり, 「器物」にからめて, faculty, aptitude, acute, skill 等の語彙説明が記されている。)

17

- 覚 (p. 329) 學術ニ又一ツ言フヘキコトアリ 一ツヲ system 規模 in science 一ツヲ method 方法 in art (…)/ (p.330) a ^{全キ}complete ^{示シ}exhibition of ^{其物ニ欠クヘカラサル}essential facts, ^事arranged in ^{位置}rational dependence, ^{論スヘキ}and ^①related by some common law, principle or end. ^{相渉}system of botany ^{相通}system of chemistry ^理physical system ^則solar system ^{目的}a system must be in more or less symmetry (architecture) its proportion is equal.
- (「朱子」に関して, 省略) 然トモ強テ symmetry ヲ求ムル必ス危キコトアリ又事ノ性ニ従フ systematic ニ出来ヌコトアリ history, natural history 名ケテ ^{記述}descriptive science ^学/ (p.331) 然多少 system ヲ存シ (「和漢」の例…省略)
- Method 方法 ^②regular modes peculiar to anything to be done synom method of mere mode 下 mode of an action 上 to

systematize systematical to methodize methodical

W **System** (p.1345) : 1. An assemblage of objects arranged in regular subordination, or after some distinct method, usually logical or scientific; *a complete exhibition of essential principles or facts, arranged in a rational dependence or connection*; a complete whole of objects *related by some common law or principle, or end*; a regular union of principles or parts forming one entire thing; as, a system of philosophy; a system of government; the solar system; a system of divinity; a system of botany or of chemistry. (...)

同 **Method** (p.834) : 1. An orderly procedure or process; a rational way of investigating or exhibiting truth; *regular mode or manner of doing anything*; characteristic manner. 2. Orderly arrangement, elucidation, developpement, or classification; clear and lucid exhibition; systematic arrangement *peculiar to an individual*. (All method is a rational progress; a progress toward an end.) Sir W. Hamilton.

永 (p. 34) 学術によって才識を磨かくに二ツの目的たるものあり、^{規模} System 及び ^{方法} Method。学には規模たるものなかるへらかす。術には方法たるものなかるへからす。規模とは “A complete exhibition...or end.” (覚と同様) と原語の通りにて (...) 其規模とは真理の目的を取り留めて、其より相通して條理立ち、残る所なく明白に知り、一ツに纏りしを云ふなり。譬へは System of botany and system of chemistry. (...) 又 Architecture 即ち工造者の語に symmetry 即ち齋々整々といふあり。(...) 学の規模とは相違せしものといへとも、略此の如きものなり。(...) / (p. 35) 規模は何学にてもなかるべからざるものといへとも、其中 history 及び Natural history 歴史及び造化史の学は規模になし難きものなり。是を Descriptive Science 即ち記述体の学といふ。併かし近来に到りては西洋一般に歴史をシストムに記し得るなり。(...) method 即ち方法は “regular mode...be done” (覚に同じ) にして、何事にもあれ條

理立チ順序ありて極りたる仕方なり。凡そ学に規模なく術に方法なきときは學術と称しかたしとす。

補 W本, System の第5項には, (physiol.) としての system が記載されてもいる。Method の方はW本と照合すると, いささか整合性に欠けるが, どのように解釈すべきであろうか。ここにかぎらないが, 「原語の通りにて」とある, その次の文は, 解釈の含められた(原文の) 翻訳と理解してよいと思う。

「学」(Science) に対して「規模」(System), 「術」(Art) に対して「方法」(Method), を配し, それらを「學術」の成立条件とする『永見本』の記述(引用部分の最終節)が, もし西周の意図を正確に伝えているとすれば, 西周はW本の規定(W本では, 「Art」の定義として, 既に引用したように, “A system of rules...” と記されている)から逸れたということになる。また Lewes 前掲書の “Introduction” に於いても, 「Science」に「Method」が必要であることが説かれている。今日の観点で言えば, 「学」「術」とともに「規模」, 「方法」が必要である, となりそうなのだが, 西周としては簡略に割りきり理解を容易にしたのであろうか。

「歴史」については, おそらく何らかの「入門書」を参照していたようにも思われる。あるいはフィセリングの講義に基づく知識に拠っているのかもしれない。但し, 『覚書』(p. 329) の, 「規模」, 「方法」に言及する直前で, いささか読み取り難いのだが, 「此学ノ字記憶ヲ指ストスレハ能ク中ル」として「memory」「即 capacity ノーツ」という記述がなされている。“Memory” は, 唐突でもあるが, しかし F. Bacon の「学の分類」に関しての「教養」を西周が得ていたとすれば——ベーコンの「分類」は, 『EB』(第八版)の第一巻, 『Dissertation』でも言及されている(p. 7~8)。直接この『EB』に依ったか否かは別として, 英文資料を利用して學術の体系化(「百学連環」)を試みているのであるかぎり, ベーコンに関わる記載に当たらなかったとは思

われない——“Sagacity” や “Skill” と同様な「能力」のひとつとして、そして言うまでもなく「歴史」との関わりを見とおして、ここで “Memory” を取り扱ったように推測される。後述する「歴史」の「普通学」の中での位置とも、当然、関連してくるのであるが、ここでは、『B-2』での “History” の項の記述の一部を示しておくことにする (p. 960)。 “...history may be either considered in the light of an intellectual exercise in the department of human knowledge or science, or as a form of literary composition. Bacon reckoned it as the chief component part of learning, and studied it in its relations to memory, while he placed philosophy and poetry below it, as appearing only to the understanding and imagination.”

18

覚 (p. 331) (….) 此 lecture ノ名目ニ叶フ環ヲ言フ者ヲ作りタリ然シ其環ハ不タ図形ニ至ラス 只二条ノ糸ノ如シ 此ニ条ノ糸ヲ以テ凡百學術ヲ貫カント欲ス／(p. 332) (….) 今前篇後篇ヲ別チ前篇ニハ学ヲ主トシテ術ニ及ヒ 後篇ニハ術ヲ主トシテ学ニ及フヘシ (….) 連環ニ前後ヲ別ツハ (….) 上下ノ區別ニテ (….) 横ノ二線 即緯線ニツト心得ヘシ (….) 経線一モナシ 是レ lecturer カ苦心スル所 (….) 縦ノ區別カイル (….) 此経線ノ大綱ヲ別テ 一ツヲ Common ト云フ 普通ノ學術 其二ヲ Particular 殊別ノ學術

補 “lecture”, “lecturer” は西周じしんの英語表記であろう。

「連環」については、W本 “sagacity” の項 (本稿 p. 80) に, “link of the chain” とあったが, 『B-2』序文 (p. vi) にも “to revise all the articles, and to make all fit each other as the links of one chain” とあることからすれば, 學術の系統的な展開 (進歩)

を構想していたヨーロッパの一時代の、ひとつの特質的な記述を西周も採用した、ということになるであろうか。

“Common” と “Particular” という分類基準は、西周じしんが「創見」と述べるところのものであるが、一般的にはこの種の区別はしていないようである——たとえば『Chambers’s Encyclopaedia』（1868年版）第八巻，“Science”の項では，“Theoretical Sciences”と“Practical Sciences”，あるいは“Abstract, General or Fundamental Sciences”と“Concrete, Derived or Applied Sciences”という“distinction”がなされている（p. 546）——W本では“Pure Science”と“Applied Science”という区別であったが、他の辞書等を見ても、およそ上記のような区分に従っており，“Common”と“Particular”——これは英語表記としてもいささか対立させ難いように思われるが——という分類は見出されない。

19

覚 (p. 334) 学ハ上面ノ一線 術ハ下面ノ一線ニテ (…)
一ツヲ intellectual science 一ツヲ physical science intellectual moral
spiritual mental 用法不定 metaphysical kant Aristotle physical material 其別 army & navy are physical force tactic & stratege are mental force

W **Intellectual** (p.703): 1. Belonging to the mind; performed by the understanding, *mental*, (…)
4. Relating to the understanding; treating of the mind; as intellectual philosophy, sometimes called “*mental*” philosophy.

同 **Physical** (p.983): 1. Pertaining to nature, as including all created existence; obeying the laws of nature; also, relating to natural or *material* things, as opposed to things *mental*, *moral*,

spiritual, or imaginary; *material*; natural; as, *armies and navies are the physical force* of a nation; whereas wisdom, knowledge, skill, and the like constitute moral force; a physical body or substance is a material body or substance, in distinction from spirit. 2. Pertaining to physics, or the science of nature, or to unorganized matter; treating of, or relating to, the causes and connections of natural phenomena; as physical sciences; physical laws, and the like.

永 (p.36) (…)^{心理上ノ}又学に Intellectual Science 及び^{物理ノ}Physical Science とて二ツあり。此^{精神}心理上の学は欧羅巴中極りなく種々に呼ひなせり。^{心性}mental, ^{礼儀}moral, ^{物理外ノ}spiritual, metaphysical 等なり。(…) 心理, 物理の二ツを譬へは軍をなすに其強サを論し及び銃砲器械等に就て論するは物理なり。其の計策及び方略の如きは心理なり。(…)凡そ物理は眼の視る所に係はり心理は聞く所に係はるなり。

補 「心理」と「物理」との弁別が、西周の既存の「教養」と新たな西洋思想としての「教養」との、対立する、しかし或る意味では連続の内にも把え得る、基本的な課題であったことは既に指摘されているとおりであり、その「教養」のひとつとして、たとえば明治8年(1876年)に西周が翻訳出版するに到った、Joseph Havens の『Mental philosophy』での記述等が、あり得たであろう。あるいは単にこのWの Metaphysics の項からでも、その根拠は取り出されたであろう。覚本, p.335 での「philosophy ニハ Newton ヲ第一トスルノ説」は、おそらくは Lewes 前掲本の, “Newton is called a philosopher” (p.xvi) に関連しての記述であろうか。「総論」末尾に関しての『永見本』記述の引用は省略する。

以上で、いわゆる「総論」の部分での、『覚書』ならびに『永見本』の、英文原資料との照合を終える。既述のように、可能性としては、西周が明記していない部分に対しては、全く別の資料に依拠したにもかかわらず『ウェブスタ

一辞典』（1864年版）と同様の記載があった、ということがあり得ないわけではない。しかし、ここまでに確認し得た範囲で言えば、『ウェブスター辞典』（1864年版）の記述を基礎とし、そこでの定義に従って各語彙の意味領域を確定し、同時に、ルイス、ミル等の著作、あるいはフィセリングによる講義等から得た「教養」によって、各語彙の連鎖が作りあげる「学」ならびに「術」の体系を展開していった、そのような西周の『百学連環』に於ける作業過程は明らかになったように思われる。勿論、場合によっては「教養」が先行し、その裏づけとしての語義の確認のために『ウェブスター辞典』（1864年版）に拠ったこともあったにちがいない。そして、言うまでもなく、英文辞典に依存して語彙の意義を確めていくことは、日本語への翻訳作業それじたいでもあった。主として『永見本』に記されている英文（英単語も含めて）の翻訳あるいは翻案は、もし『永見本』の筆記が正確であったならば、という留保は依然として必要ではあるが、必ずしもいわゆる直訳ではなく、講義である以上、聴講する者たちの「教養」をも勘案しての訳出となっている。本稿では省略したが、西周が挙例している「和漢のこと」をも合わせて考えるならば、「百学連環」講義に於ける知識の伝達が、既存の語彙の体系でもある既存の「教養」の中に新たな語彙の連鎖としての新たな「教養」を組みこみ体系化する、そのような本来的な了解をめざしてなされていたことがわかるのである。

『百学連環』が「何らかの百科全書」の訳述ではないということは、西周が「百科全書」を訳出する余裕をもっていなかった、ことを意味するかもしれない。専門的な知識の不足はあり得たであろうし、網羅的であればよく、それほど深い知識を必要としない、そのような時代の要請もあったであろう。しかし、辞書の語義にまで下降し、それに依拠しての「百学連環」の試みは、おそらく、拙速に「百科全書」を訳出する以前になされるべきひとつの過程であったのであり、『覚書』の意義はまさにそこにあった、と見るべきであろう。

以下、「普通学」（Common Science）とされた部分に移る。語義の確定に

関しては依然として『ウェブスター辞典』（1864年版）に拠っているが、諸学の具体的な内容紹介は、主として『B-2』本、そして固有名詞に関しては『B-1』本に基づいていると思われる。但し、既述のように、『B-1』、『B-2』本じたいが、おそらく西周が参照した『Beeton's Dictionary of...』と発行年、発行所等が相違していると思われるので——内容の異同は、『B-1』

『B-2』本の「扉」等には明記されていないが——そのためか、あるいは他に参照した文献もあり得たためか、必ずしも細部に到るまで『覚書』の記載が『B-2』本の記述に合致してはいない。ここでも結局は、照合され得る箇所の数、対応し得るその頻度に基づいての認定にすぎないことを付記しなければならないが、当時の「百科全書」、辞書等の記述は、類似点が多い場合であっても、やはりそれぞれに固有な説明を載せているようであって、『覚書』での各項目の記述（特定の術語の有無、それらの記述の順序等）を通じて、或る程度までは「頻度による認定」の合理性を示すことができるように思われる。

たとえば、『覚書』（p.545）の「Monsoon 恒信風」での記述は、順序じたいは確定し難いのだが、以下のようなものである。「Periodical 印度洋ニテ亜弗利加東岸印度ノ南ニ在リ 日北ニ在西南風第四月末ヨリ第十月初マテ 日南ニ在リ東北風第十一月ヨリ三月マテ 日赤道ニ在ル時即我二八月風候不一 赤 24°（「赤」は赤道を示す。そのような図が描かれている）gales hurricane Calms thunderstorms アリ Monsoon ハ赤道ノ南ニ到ラス」。『B-2』本，“MONSOON”の項（p.124）には次のような記述がある。“Monsoon: (…)*the name given in phys. Geog. to the periodical wind of the Indian Ocean. From a very early period these winds have attracted the attention of the navigator, as, by taking advantage of their regular blowing, a quick and easy journey can be depended upon. Monsoons blow with the greatest force and with most regularity between the east coast of Africa and Hindustan. A north-east wind blows over this part of the ocean when the sun is in the suthern hemisphere, and a south-west when it is in the northern hemisphere. When the sun croses the equator, the winds are varia-*

ble, and gales, hurricanes, calms, and thunderstorms occur. The north-east monsoon blows from November to March; while the south-west monsoon, which does not extend south of the equator, blows from the end of April to the beginning of October. It is difficult to account for these periodical winds; they appear to be a modification of the trade winds, produced by the peculiar form of the countries lying within and around the Indian Ocean.” 斜字体は『覚書』と対応する部分である（「赤道」「24°」については、同じく『B-2』, *Mathematical geography* で扱われる）が、これを見ていけば、『覚書』の記述は『B-2』本の項目の抄訳¹⁾である、と認定するのもそれほど無暴ではあるまい。但し、つねに、『B-2』本の記載以外にも、『覚書』に合致するような記述があり得る、そのような可能性は残りつづけるのであるが、しかしたとえば『EB』（第八版）の“Monsoon”では（第15巻, p.503）“a regular or *periodical wind, in the Indian Seas*, blowing constantly in the same direction during six months of the year, and contrariwise during the remaining six.” とあるだけであり、また W. T. Brande 編『A Dictionary of Science, Literature and Art of every branch of humain knowledge』（1848年版, New York）での“Monsoon”は, “In physical geography, the name given to a certain modification or disturbance of the regular course of the trade winds which take place *in the Arabian and Indian seas*. Between the parallels of 10° and 30° south latitude the eastern trade wind blows regularly; but from the former parallel northwards the course is reversed for half the year, and *from April to October the wind blows constantly from the sonth-west*. During other six morths of the year regular north-east trade wind prevails. The south-west monsoon is supposed to be occasionned by the great rareficion of the atmosphere over the extensive regions of Eastern Asia during the summer month.” となっている。「内容」としての相違はそれほど無い、とも言えようが、しかし英文語句（の翻訳）の次元で

は、やはり『B-2』本の記述が『覚書』での「Monsoon 恒信風」の典拠であると見るべきであろう。同様に、たとえば“Geometry”に関して、『覚書』（p.368～p.372）では“line and surface on plane point”を扱う幾何学と“solid”を扱う幾何学の二つに分けることを記し、以下、“conic section”, “axiom, theorem proved problem solved lemma”等（p.368）を挙げてから、幾何学の歴史として次のように述べている。「幾何ノ起ハ 古ク埃王 Sesostris ノ時ニ Nyle ノ河水溢シテ年々測量ヲナスニヨリテ 此術ヲ発明シタリト見（…）其後 Thales+640紀前-545 希 ioni seven sage ノー philosophy ノ太祖 希ヨリ埃ニ行テ教ヘタリト云フ Anaximander+610-pupil & friend of 同上 月日光ヲ受ケ地体円球 地球儀 地図 Anaximenes unknown pupil of 同上 sundial Pythagoras+580=570- Plato+429-347 academy ノ額ニ 幾何学ニ通セサルモノハ 此内ニ入ル勿レト表セリト云フ conic section ノ発 是ヨリ Euclid ヘ行クヘシノ七百年代終（?）ヨリ千八百年代マテ Legendres french Elemens de Geometrie analitical geometry ハ先キニ」。

『B-2』での“Geometry”には、『覚書』中の術語、記載がある、と断定しておけばよいのであるが、『EB』の記述との関わりを見るために、いちおう該当する原文を引用しておく。『B-2』の“GEOMETRY”（p. 861～p. 864）：（Gr. geometria, formed of gea, the earth, and metreo, I measure), may be strictly defined to be the doctrine of the extension of such things as *lines*, *surfaces*, and *solids*. The attributes or properties of bodies may, in order to be more readily explained, be resolved into two classes, one comprising the general characteristics of all, and other such only as are included in particular or peculiar bodies. Extension, figure, magnitude, mobility, divisibility, impenetrability, weight, and inertia, may be mentioned as some of the properties which belong to the first class; whilst some of those in the second are solidity, liquidity, transparency, and such-like. Of all these properties mentioned, only

extension, magnitude, figure, and divisibility, comme under the special branch of science denominated *Geometry*; the different properties which remain, coming under the head of Natural Philosophy or Physics. *The important science of geometry was first cultivated in Egypt*, according to the testimony of Herodotus, which historian dates its origin from the following circumstance:—*Sesostris, the king of Egypt*, shared the lands at Thebes and Memphis between his subjects, and each portion was marked out by different landmarks; but, owing to *the inundations of the Nile*, these boundaries were frequently destroyed, and it became necessary, as often as this was done, to restore them by *measurement*; hence a system was invented, which was termed *geometry*. *Thales*, a philosopher who lived some 610 years before Christ, brought the science into *Greece from Egypt* (西周の「希ヨリ埃へ行テ…」はこの部分の誤訳であろう), whither he had, it is related, gone in search of knowledge at rather a late period in life”²⁾。以下、『覚書』に対応する語句として, “After *Thales* came *Anaximander*, who is said to have invented *geometrical charts*, and *the sphere* and *gnomon*; next followed *Anaximenes*, who invented the *sundial*, (…). *Pythagoras* instituted the theory of regular solids; (…). *Plato* seems to have had the highest opinion of the science, and we read in the classics, that the *inscription* “Let no one ignorant of geometry enter here”, was placed over the portals of his school. The theory of *conic sections* dates its birth from the Platonic schools, and to the same source may be ascribed the beautiful theory of *geometrical loci*, which not only interesting from the hidden truths which it contains, but also from its importance in the solution of problems”³⁾。(…)/(p.862) *Euclid’s Elements* are the foundation of the science, and all modern geometry is composed only of variations on his well-known theorems, axioms, and deductions.” “(…) Geometry remained quiescent

from the 8th century to the 17th, when it was again taken up with a similar zeal as that by which it was prosecuted in the old Greek empire." "(...) Euclid is one of the best treatises which could be had on the elementary part of the subject; and after him comes *Legendre's Geometry*, which admits the student into the higher ranks of the science." (...) "*Geometry is, consequently, divided into two branches, one of which treats of figures on a plane, the other of the formation and ramification of solids. Ist. Lines and figures on a plane.* (...) A point has position, but no magnitude, and a line possesses only length: hence points and lines are closely allied; (...) / (p.863) (...) With regard to the terms used in geometry, an axiom is a proposition the truth of which is evident at first sight to the observer; a theorem is a truth which has been demonstrated or reasoned; and a problem is a question proposed which requires solution; a lemma is only a subsidiary truth employed in the solution of a problem or the demonstration of a theorem; (...) / (p.864) (...) Legendre's *Eléments de Géométrie* (...)." とつづいている。『覚書』の記載順序とは必ずしも一致していないため、『B-2』を典拠と断定するのに若干の懸念がないわけではないが、注2), 3)をも考慮してみるならば、ほぼ確定的であると言い得るであろう。

Thales, Anaximander 等の固有名詞については、『B-1』の記載を参照したことが確認できる。個別的には後に扱うことになるが、たとえばギリシアの哲学者たちの生没年代は、それぞれの辞典等でまちまちの場合が多い。いま、『Cassell's Encyclopaedia of General Information』(London, 発行年は記載されていないが、1900年前後か)を『C』、『The Young Folk's Cyclopaedia of Persons and Places』(New York, 1896年)を『Y』、『Zell's Popular Encyclopaedia』(Philadelphia, 1871年)を『Z』と略記して、『覚書』の記載と比べてみると以下のようなになる(「B.C」ならびに「頃」は原文にない場合もある)。

Aristotle	『覚』(p. 354)	<u>B. C. 384~322</u>
	『B-1』	B. C. 384~323
	『C』	B. C. 384~332
	『Z』	<u>B. C. 384~322</u>
Demosthenes	『覚』(p. 354)	<u>B. C. 385~322</u>
	『B-1』	B. C. 382~322
	『Z』	<u>B. C. 385~322</u>
Plato	『覚』(p. 425)	<u>B. C. 429~347</u>
	『B-1』	<u>B. C. 429~347</u>
	『Y』	B. C. 429頃~348
Pythagoras	『覚』(p. 397)	<u>B. C. 570~504頃⁴⁾</u>
	『B-1』	<u>B. C. 570頃~504頃</u>
	『Y』	B. C. 580頃~500頃
	『EB』(第十卷, p. 497)	B. C. 580頃
Socrates	『覚』(p. 396)	<u>B. C. 469~399</u>
	『B-1』	<u>B. C. 469~399</u>
	『C』	B. C. 470頃~399
	『Y』	B. C. 470頃~399
Thales	『覚』(p. 397)	<u>B. C. 640~545頃</u>
	『B-1』	<u>B. C. 640~545頃</u>
	『Y』	B. C. 636頃~546頃

『C』, 『Y』は任意に参照したにすぎないが, いずれにしても『覚書』の記載年代は『B-1』もしくは『Z』に合致する点は見えてとれよう。西周が『Z』を入手し得たか否かについては, 既述のように疑問があるが, それと関連して, もうひとつ, 各辞書による記述の相違の例を挙げれば, ルターの「回心」に関する伝説的挿話の部分である。『覚書』(p. 408)では, “lighting dead of his friend and previous education カラ monastery life”と記されているが, たとえば『EB』(第十三巻, p. 723)では, “...after experiencing the shock

of the death of one of his friends by assassination in the summer of 1505, and soon after that, being startled by a thunderbolt striking the earth by his side, he determined to give up the world and retire into the convent of the Augustians at Erfunt” となっており、それに対して『B-1』(p.802)では, “...walking one day in the fields with a fellow-student, his companion was struck *dead* by *lightning*, which so affected Luther, that he determined to retire from the world. He accordingly entered a *monastery* of the order of St. Augustine, where he led a pious and studious *life*.” であり, 又, 『Y』では, “...He was very religious, and once when in danger of being struck by lightning, vowed that if his life were spared he would become a monk. So when twenty-two years old he joined the Augustinian Monastery of Erfurt, ...” と書かれている。この部分だけでは、やはり『B-1』が典拠であるとの感触が強いが、しかし『覚書』でのルターに関する記述の他の部分は、『B-1』よりは『Z』に依拠しているように読みとれるのである⁹⁾。

以上、いささか煩雑ではあったが、「普通学」、「殊別学」の内容紹介に関する主たる原資料として『B-1』、『B-2』、そしておそらく『Z』が用いられていることを、おおよそ示し得たように思われる。類似の記述を見出すこともかなり困難な作業であるが、類似の記述がそれ以外には存在しないことを証明するのは殆んど不可能に近い。他のさまざまな資料じたいの検討についても未だなすべきことは多いが、現時点でのいちおうの経過として以下、提示していくことにする。

注

- (1) 『Z』の“Monsoon”(第2巻, p.360)はまったく同じ記述である。なお次の“Geometry”の項についても同様であるが、「抄訳」であることに、おのずから、西周の問題意識が投影されている、と見ていくことは必要であるように思われる。また、W本での語義紹介と異なり、学の内容についてはそれが訳文によってなされている点は注目すべきであろう。
- (2) 『B-2』が『EB』を範としていることは確かであるが、この部分については、

内容的に『B-2』の記載は、順序を変えているものの、殆んど『EB』の記述（第10巻, p. 497）と同様である。しかし、順序が変わっていることが、ひとつの指標であるとも言える。

- (3) 『Z』本 “Geometry” の項は、ここまですべて終わっており、それは『B-2』の記述と、まったく同じである。
- (4) 『覚書』での生没年記載は、必ずしも統一されていない。たとえば、Pythagoras の生年は、p. 371 では「+580=570」とあり（これは『Z』での「Born in Samos, probably about B.C. 580—570」(第2巻, p. 693) に照応する), p. 422 では、「586bc」と記されている。また、p. 397 では、「570—504 perhaps」とある（570の7の下に8（?）が書かれている）。
- (5) 『Z』が『覚書』の記述と、『B-1』、『B-2』以上に合致する箇所は、数としてはそれほど多くはない。少なくとも『B-2』についていえば、西周が『B-2』ではなく『Z』のみに依拠した、と見るのは、Astronomy, Buddhism, Philology, Rhetoric などの項目でわかるように、全体から判断して、まず難しい。「ルター」についての『Z』の記載は後述。

20

覚 (p.339) Common Science ÷ 四 in number 一° history 歴史
 二° geography 地理学三° literature 文学 四 mathematics 数学
 一°歴史? in common ナ all science is no other than history,
 & in all science 古今沿革ナキハナシ (….) history ト云フハ (….)
 総テ古今人世ノ沿革履歴ヲ記スモノヲ指ス/(p.340) コノ history ニ
 諸体アリ ιστορειν to know 一 history 史 三 annals 編年史 二
chronicle 年歴箋 Χρονος time synon. history is a methodical
record of important events, which concern a community of
men, usually so arranged as to show the connection causes
and effects chronicle is a record of such events, when it
conforms to the order of time, as its distinctive feature. an-
als are a chronicle divided out into distinct years. 此内 cause
 & effect ニ口訣

W History (p.630): [Lat. *historia*, Gr. *ἱστορία* from *ἵστορεῖν*, to learn or *know* by inquiry. ...] (….) *syn.* (の項目に) *History is a methodical record...causes and effects. A chronicle is a record of ...distinctive feature. Annals are...distinct years.* (覚と同じ)。

永 (p. 73～p. 74) 覚の語句の翻訳, 説明。

補 「普通学」の「四ツ」およびその順序については、『知説』などでも後に言及されるように、西周が腐心したところであるが、ここでの「History」の「普通」である所以は、『永見本』に拠るなら、「History なるものは古来ありし所の事跡を挙て書キ記し、所謂温故知新の道理に適ふを以て普通とす」と述べられている。先に Bacon の分類での「歴史」の位置を見たが、そのような西洋思想（のひとつ。たとえば『B-2』, History の項 (p.960) での記述。“After the revival of the letters, history became one of the greatest of literary works, and as such it is esteemed and valued in the present day.”）と西周本来の「教養」との合致が「歴史」を「普通学」の「第一」に据えた根拠と言えようか。

“Chronicle” に対する説明としての “Χρονος, time” は同じく W 本に見出される。『永見本』では、これまでと同じように、英語(文)への訳が記されている(「歴史」の「三ツの体裁」としての「History 正史」, 「Chronicle 編年史」, 「Annals 年歴箋」や「causes 源由」, 「effects 応効」等)が、ここでは省略する。

覚 (p. 341) (….) サ history ノ類ニ種々 (其)^{*)}ノ一 biography Bios life graphy to write (其)ノ一 Chronology Χρονος time proper dates history without chronology is dark and chronology without history is dry./(p.342) (其)ノ一 synchronology syn together (其)ノ一 Romance first in Roman language chivalry

gallantry religion (其) ノー fable fari L. to speak two in
 sort apologue απολογος to speak parable παραβαλλεῖν to throw
 besides compare

*) 「其」を補って読む。以下も同様。

- W **Biography** (p.134) : [...Gr. βίος *life*...γράφειν, *to write*]. History (p.630) の項に, “biography, which is the record of an individual’s life” とある。
- 同 **Chronology** (p.228) : [Gr. ... from Χρόνος, *time*, ...] 例文として, “If *history without chronology is dark and confused, chronology without history is dry and insipid.*” A. Holmes とある。この直前に, “... assigns to events or transactions their *proper dates.*” と説明されている。
- 同 **Synchronology** (p.1343) : [gr. σύν: with, *together* ...] Contemporaneous chronology.
- 同 **Romance** (p.1147) : [... Lat. *romancium*, the common vulgar language, which sprung from the *Roman* and Latin language, and a species of fictious composition which was *first written in this language*, from Lat. *Romanicus*, Roman.] (1. の項目での説明の後に) “Upon these three columns—*chivalry, gallantry, and religion*—repose the fictions of the middle ages, especially those known as romances. ...” Hallam. Syn. FABLE (…)
- 同 **Fable** (p.489) [... Lat. fabula, from *fari*, *to speak*, say] 1. A feined story or tale, intended to instruct or amuse; a fictious narration intended to enforce some useful truth or percept; an *apologue*.
- 同 **Apologue** (p.63) : [... Gr. ἀπόλογος, story, tale, fable, from ἀπό, from, and λόγος, speech, λέγειν, *to speak*.] A story or relation

of fictitious events, intended to convey useful truths; a moral fable. 【➡】 An apologue differs from a parable in this: the parable is drawn from events which take place among mankind, and therefore requires probability in the narrative; the apologue is founded on supposed actions of brutes or inanimate things, and therefore is not limited by strict rules of probability. AEsop's fables are good examples of apologues. Syn. See PARABLE.

同 **Parable** (p.945) : [... Gr. ... from παραβάλλειν, to throw beside, to compare ...] A fable or allegorical relation or representation of something real in life or nature, from which a moral is drawn for instruction. Syn. See APOLOGUE.

永 (p.76) 右挙る所の三種の歴史の外なほ之に類似するもの種々あり。第一 Biography...第五 Fable (覚の記述に対する説明がなされている)。

覚 (p.342) 終一 mythology μῦθος fable tradition respecting the supernatural actions of gods. / (p.343) a tale of some extraordinary personage or country, that has been gradually formed by, or has grown out of the admiration and veneration of successive generation. (….) 尚古伝ノコトハ神学ノ條ニ説クヘシ (以下『史記』に関して。省略)

W **Mythology** (p.872) : [... Gr. (...) from μῦθος, fable ...] (...) 2. A system of myths, a collective body of popular legends and fables *respecting the supernatural actions, of gods, divinities, and heroes.*

同 **Myth** (p.872) : (...) A fabulous or imaginary statement or narrative, conveying an important truth, generally of a moral

or religious nature; (...) *a tale of some extraordinary ... of successive generations* (覚と同じ)。

22

覚 (p. 343) サテ史料ノ区別ニ二様アリ document anecdote (其) ノ
一 authentic (其) ノ一 genuine

W **Document** (p.401) : (...) 2. That which teaches authoritatively, sets forth, or establishes; any thing furnishing proof or evidence; especially, an original or *official paper* relied upon as the basis, proof, or support of any thing else.

同 **Anecdote** (p.51) : (...) a *biographical incident* or fragment; a single passage of *private life*.

同 **Authentic** (p.94) : (...) 1. Having a genuine original or authority, in opposition to that which is false, fictitious or counterfeit; (...) *Syn. AUTHENTIC, GENUINE. These words, as here compared, have reference to historical documents. We call a document genuine when it can be traced back ultimately to the author or authors from whom it professes to emanate. We call a document authentic (...) when, on the ground of its being thus traced back, it may be relied on as true and authoritative; and in this sense the term is used in respect to legal instruments. (...)*

補 『永見本』での翻訳、解説(省略)に対応する部分も上記文中の斜字体で示されている。

「歴史」に関しては、『覚書』中に見出された英文表記のすべてを根拠づける——W本の記載以外の——何らかの資料があったように推測されるが、現在までのところ、それを見出し得ていない。

23

覚 (p.344) : サ史種類 = (其) ノー universal (其) ノー particular (….) 又 ancient middle age f. 700 t. 1400 (….) modern there must be an universal history, which are composed of the facts of all humain race in the world, but at present not (其) ノー particular 各国 (….) / (p.345) Herodotus + 484b.c. greek Plutarch + 66af.c. greek Strabo + 50b.c. - 20a.c. justinus Africunus 2nd cen Roman macaulay + 1800 - 1859

補 この箇所についても原資料を提示し難い。universal と particular の区別は、それほど特殊とは思われないのだが、意外に、典拠を求められない。“there must be ... at present not” という英文も、W本、『EB』、『Z』、『B-2』に見出せず、西周の「作文」のようにも思われるのだが、不明である。『B-2』には Herodotus, Justin, Macaulay の名は挙げられている。また、それぞれの（覚に示された）固有名詞は『B-1』あるいは『Z』に記載はある*1) のだが、それらを引いてきた根拠となる原文は、現段階では、確定し得ない。

*1) 『B-1』での生没年と合致するのは Herodotus (生年のみ), Macaulay, そして Justinus である。Justinus の項 (p.708~p.709) では, “a Latin historian of the 2d century,/who made an abridgement of the “Universal History” written by Trogus Pompeius.” とある。Plutarch については, 生年は「48年頃」(『B-1』) であるが, 『Z』には “In A.D. 66 he was a pupil of the philosopher Ammonios at Delph” とあり, 生年ではないが覚の年号と合致する記述である。Strabo については, 『B-1』, 『Z』とも, 生没年の記載がない。西周が他の資料に拠ったものと思われる。

覚 サ歴史ト相對シテ一種ノ学アリ Archaeology ト云フ 通古学 f.g. ἀρχή beginning 又 antiquity f. antiquité 其人 antiquary 其世ノ地理城郭居室被服飲食器材冠婚喪祭ホ百般風俗ヲ考証スル学 其ノ趣意 希臘 羅馬 中古 此学漢和ニハ欠ケタリ

W **Archaeology** (p.71) : [Gr. ἀρχαιολογία, fr. ἀρχαῖος, ancient, ἀρχή, *beginning*, ...] A discourse on *antiquity*; learning pertaining to antiquity; the science of antiquities.

補 History の一助としての Archaeology というような指摘は『B-2』に見られる (p.110) が、その対象としての「地理城郭…百般風俗」は、W 本および『B-2』の記述 (“materials, subjects”) を西周がまとめたものと思われる。『永見本』には、『覚書』の語彙の説明以外に特に新しい記載はない。

25

覚 (p.346) 通今学 geography γε earth 此学和漢共ニ備ハラス 三區別 mathematical——又 astronomical 数理上ノ—— physical——物理上ノ—— political——政事上 (其)ノ一数理上 地球ハ行星ノ一ツ諸行星ト太陽ヲ周環シ春夏秋冬ヲナスノ理 寒正熱五帶又自転ニテ昼夜ヲナスノ理 地球ニ想像上ノ線ヲ設テ赤道ヲ立テ南北緯ヲ定 又東西經ヲ定ムル理等 (其)ノ一物理上海陸島岐半島海峡地峡山川山脈平地ノ區別 五帶ノ草木禽獸 各地ノ地質 Geology 山産河産海産ノ區別 / (p.347) (其)ノ政事上 各国經界政体風俗人種人文教法人口男女多寡 病疾産業製作稼穡兵備貿易 財政輸入輸出ノ多寡ホ ナホ古来各国沿革大略ホ

B-2 **GEOGRAPHY** (p.858~p.860) : (Gr. from, *ge*, the *earth*, /and *graphe*, a description) ... It is usually arranged under *three principal*

branches,—Mathematical, Physical, and Political. Mathematical geography deals with the earth principally in its planetary relations, as a member of the solar system; (...) hence it is sometimes termed astronomical geography. (...) By mathematical geography, we ascertain that the earth is spherical in form, or rather what is called an oblate spheroid ...; that its orbit round the sun is slightly elliptical ...; that the earth has also a motion round its own axis, which it completes every twenty-four hours, and that it revolves round the sun with its axis constantly inclined to the planes of its orbit at an angle of $66^{\circ}32'$. To the former of these motions we are indebted for day and night; to the latter, for the vicissitudes of the seasons. In order to determinate the relative positions of different places upon the earth's surface, geographers have supposed certain lines or circles traced upon it. One of these, the equator, being equally distant from both poles or points of rotation, divides the earth into two hemispheres,—the northern and southern. Another encircling line, drawn at right angles to the equator and passing through the poles, divides into the eastern and western hemispheres. Parallel to the equator and numbered from it, are the lines or degrees of latitude, (...) The equator is divided into 360 equal parts, and lines drawn perpendicularly from the points of division to the pole constitute the lines or degrees of longitude. (...) All places lying in the same latitude have equal length of day and night at the same time while all places in the same longitude have mid-day at the same time. (...) The sun is vertical at different times of the year to all that portion of the earth's surface lying between $23^{\circ}28'$ N. and $23^{\circ}28'$ S. of

the equator; and *this region being subject to the greatest amount of heat, is called the Torrid Zone* (...) *the whole region within 23°28' of either pole, (...) is, for a certain period of the year, involved in continual night or continual day. The northern of these regions is termed the North Frigid Zone, ... the southern, the South Frigid Zone, (...)* Between the tropic of Cancer and the Arctic circle is *the North Temperate Zone*; and between the tropic of Capricorn and the Antarctic circle is *the South Temperate Zone*.—Physical geography comprehends a description of the principal features of the earth's surface, as consisting of *land and water, the different animal and vegetable products*; climate, elevation and direction of *mountain-chains*, &c. (See PHYSICAL GEOGRAPHY). Political Geography describes the *countries and nations of the earth* as they are politically divided, and deals with mankind in their social aspect and organization. *It gives an account of the laws and government of the different countries, their language, religion, civilization, resources (...).* (以下、「Political Geography」で扱うべき各国の“different parts”が挙げられている。項目としては、Physical features, Climate, Geology, Botany and Zoology, Agriculture, Mining, Fisheries, Manufactures, Commerce,/(p.860) Facilities for Commerce, Population, Social condition, Language and Literature, Science and Art, Government, Religion, Education, Crime, Defense, Finances, Taxation, Money, Antiquities.)

補 「通古学」に対する「通今学」としての「地理学」、という設定は、西周の「創見」によるものかもしれない。『永見本』での記述は、「歴史」、「通古学」の場合と同様に、『覚書』の語彙、説明を敷衍したも

のである。『覚書』の「病疾」は、『**B-2**』, **Crime** の項に記されている。

(つづく)

(昭和60年10月)